37　幾何学、リベラル・アーツと博物学

柴田幸雄

すでに本学会で「生理学からの医化学の分化」「戦争中の自然科学教育」そして「混乱している学術用語のカタカナ書き」について報告してきた。

今回は平成三年七月から施行されている「大学設置基準の改正」をふまえて医学あるいは自然科学の基本として重要と思われている博物学をリベラル・アーツの観点から見ようと思いここにその二〜三を報告する（Dan Pedoe; Geometry and the Liberal Arts: The Geometry of Renè Descartes; Dover Publ. Inc.）。

博物学は明治になって古いものとされ退けられたものの東京帝国大学生物学教室として残り、動物学・植物学教室として活動、植物学の矢田部、動物学のエドワード・モース両氏により日本博物学のレベルを世界的にあげたが魚類学の田中氏を最後に消えていく運命にあった（NHK博物学の世紀）。

わが国の中等教育でも昭和十三年昭和十四年頃ははっきりとした博物学の授業が行われていたが（北野百年史・鯱光百年史）、昭和十五年をさかいに変化がみられ昭和十六年には尚その名をとどめているとはいえ大東亜戦下の教育改正があり国民学校の発足で中等学校の国定理科は物象、生物となり博物学は消えていく（益富・物象鑛物学、秋元・レオナルド・ダ・ヴィンチの解剖手稿、家永・穀物文化の起源）。さらに昭和三十五年以降（所謂六〇年安保以降）は分子生物学革命ともいわれ、生物学は分類学的な博物学からさらにはなれ、現在、動物行動学や動物生態学（ファーブル昆虫記等）にその一端が残っている（McNeil Alexander; Animals: John R. Krebs et al; An Introduction to Behavioural Ecology ジョルジュ・オリヴィエ・人類生態学・文庫クセジュ、吉田・公衆栄養入門、E・C・ピールー・数理生態学、内田・動物系統分類の基礎、今泉・分類から進化へ）。

他方博覧会、博物館、図書館（美術館、水族館なども？）の

発展史もこれに関連するが西暦一八五一年（嘉永四年）ロンドンで最初の万国博覧会が開かれ（ライフ・人間史・10・プログレスのエイジ）さらに西暦一九〇〇年（明治三十三年）パリ博となるにつれ日本もこれに負けじと富国強兵・殖産興業ともあわさってその発展を示し国内でも明治十年、内国勧業博が開かれている。

一九〇〇年のパリ博は世紀末でもあり植民地社会学会議なども開かれていた。しかし大英博物館の歴史なども考えていくと、探検→植民あるいは時には侵略→植民となりかねないわけであり、またこれはイスラエルの占領と併合や日本の事変（シナ事変）と戦争（大東亜戦争）の区別などむつかしい問題ともなりかねない（中島・幕吏松田伝十郎のカラフト探検、間宮・東韃地方紀行、大川・英米東亜侵略史）。

また昭和四年の朝鮮博や昭和六年の台湾博もその一つのあらわれであり、同年すなわち西暦一九三一年フランスでの植民地博はその最たるものであろう。日本では昭和十五年、すなわち皇紀二六〇〇年を記念して万国博およびオリンピックが開かれる予定であったが、それぞれ別々の理由で開かれず幻のものとなってしまった（NHK万国博覧会、動物の行動）。

これらのことをふりかえってみると、博物学の研究においても探検→収集（集輯）→分類という所謂古いが大切な分類学からはじまっている。今教養とか進学課程とかいわれてきた教育が見直されてきているが、これはアメリカの日本占領下における六三制の導入以来の変革であり旧制度における師範、高等師範、文理科大学卒業の教員を中心とした教育と現在の大学専門課程（教育学部を含む）からの教員による教育との比較検討を行うこともなろう。この時期においてふたたび博物学的教育の見直しを行なう事が必要であると思い、問題提起をした次第である。（スケルトン・図説探検地図の歴史、尾崎・書物の運命、Pierre Gasar; Bufon: Tommass Campanella; Apologia Pro Galileo: Raymond C. Moore; Introduction to historical Geology）

（愛知医科大学生化学）